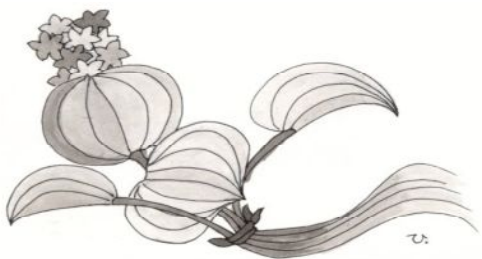


レバー

納富 泰子



春雷がひとつ腹の底まで、ずん、と鳴り響いたあと、一瞬、空が白い気を吐きました。
見上げると、ほどけた薄い雪片が、夕暮れのかすかな光をとどめて、沈むように落ちてくるのです。
やがてあたりは、降りしきる雪で息が詰まるほどの、蒼白い日暮れになりました。四辻の角の明るいガソリンスタンドも喫茶「リング」の小さな灯りもその奥の住宅地の窓灯りも、泡雪に遮られて、遠い静かな幻のようです。
耳の後ろで血のめぐる音だけが響き、私はうるさい頭を抱えて、立ちすくみました。

忘れ雪は、春日原方面の郊外にだけ降ったようでした。

福岡市の中心地天神に向かう終電の、肩越しに過ぎていく光景から、雪景色がすぐに消えて、乾いた黒と藍色とオレンジの夜景に変わりましたから。

天神の警固公園の裏手にあるワンルームマンションが私の住処です。マンションへの、若者たちの往来で賑やかな短い道にも、夜更けの乾いた冷たい空気が張り詰めているだけで、雨すらも降った様子がありません。

春日原と天神は、電車で十分ほどの距離なのに、ずいぶん空模様が違うものです。

一日が経ち、日暮れてのちに、夫の住む春日原にふたたび戻ってくると、前夜あれほど積もっていた雪は跡形もなく消えています。柔らかない春の夜気を隅々まで呑み込んで、アスファルトの道は黒くなめらかです。

ガソリンスタンドを右に曲がると、緩い坂道に添って真新しい住宅が並んでいます。いちばん奥から二軒目の赤みがかったベージュ色に塗られた家が夫の家です。前庭には三色スミレが植えられています。三色スミレは、夫が好きな花のひとつです。理由は、「生命力に溢れているから」だそうです。

夫はまだ帰宅していません。昨夜からガレージに車はありませんでした。出張の時には福岡空港まで車で行く

のが夫の習慣でした。普段の通勤は西鉄電車の大牟田線を利用して福岡駅まで行くはずですが。

家の前で歩みをゆるめながら眺める夫の家は、居間らしい広い窓に灯りが点っていました。「妻」なのでしょ、カーテンの奥にぼんやりとした影が動いていきます。影のふくらみが右から左へ、また右へと動いているのをしばらく立ち止まって眺めました。「妻」は、素朴な感じのタンポポのように笑う女なのです。

カーテンの向こうの「妻」の影がふつと離れ、私は急ぎ足に家の前から立ち去ります。

二時間ほどを、いつものように喫茶「リング」で潰しました。建物も古いのですが、内装もずいぶん古めかしい喫茶店です。流れている歌は、今日も私の知らない古い曲です。「It's a new day... It's a new life」と女の声が、粘り強く誰かに訴えるように歌っています。喫茶店の窓から左に、四辻が見えます。筋向かいの角のガソリンスタンドが、明るさをみせています。四辻を見張っているのですが、夫はまだ帰ってきません。

夜十一時を過ぎると、客の立ち去った「リング」は小さな常夜灯だけになり、夫の家の玄関灯も暗くなりました。夫が昨日から帰宅しないままだということは、遠隔地へのお出張仕事なのでしょうが。

そう思ったとたんに背筋がゆるみ、疲れを感じました。帰るしかありません。

切符を入れたポケットの奥を探りながら、駅の改札口で立ち止まると、後ろから突きあたるように若い男がすり抜けていきました。「婆あ」と唾を吐くような声が耳を打ちました。この青年には、三十六歳の私が年寄りに見えたのでしよう。

私の腹部には、Jの字型の大きな傷跡が刻まれています。傷跡は今も湿っている気がします。衣類に表面が擦れるような違和感があります。移植手術後二年目の今もときおり、不意に引き攣る痛みを感じます。

背中を真つ直ぐにすると傷口が開きそうな気がして、猫背になる癖がついてしまいました。医者は、そんな心配は一切ないです、と笑いますが、壊れたジッパーがチーッと開くように傷口が開いてしまう気がするのです。夫はどうなのでしょう。やっぱり、傷口が開いて、くっつけて貰った肝臓が、ぼろりと外れて落ちる想像をするのではないのでしょうか。

着ぶくれたコートポケットの底に、やっと裏の黒い切符を探しあてました。切符のどがつた固い角が指先にあたると、現実的で確かなものはこれしかないような気がします。

しまうのです。夜中も構わず泣く赤ん坊がいれば、夫はますます憔悴してしまうでしょう。肝臓の機能をもし器械に組み立てるとしたら、五階建てビルくらいの規模になると聞きました。それくらい優秀な働きをする大事な臓器が日に日に駄目になっていくのです

夫の上司がよく理解してくれていて、いよいよ駄目だと本人が思うまでは在籍していても良い、と言ってくれたのは、夫がどんなに体がぎついついときでも、病気を言い訳にすることもなく、仕事の責任をきちんと果たす性格だからでしょう。

余命半年という言葉が医者から口にし、再び夫が入院しなければならなくなつたとき、私は、負けるものか、と思いました。夫との最後の日々、充実した最後の日々を、どのように過ごそうか、と自分を奮い立たせました。

夫の容態は悪くなる一方で、黄疸が出て、食道には静脈瘤ができ、腹水が溜まりはじめていたのです。余命が半年あれば良い方だ、と私は覚悟を決めました。

レバー
そういうとき、医者が言ったのです。
「たったひとつ手だてがあるにはあるのですが……。東京の病院に知り合いの腕の良い医者が出て、家族間の生体肝移植をいくつか手がけており、すべて成功させてい

結婚を意識したころ「実は俺、先天的な肝機能不全で、あまり長くは生きられないんだ」と軽くうちあけられたのでした。あのときの私の激しい感情は、何だつたのか、せつぱ詰まった気持ちで、夫にしがみついていたのです。この二歳年下の男が死ぬというのなら、死ぬそのときまで傍らにいたい、と強く願いました。

結婚して三年がたちました。濃密な三年間でした。私は、ひたすらに夫の保護者でありたいと思っていました。小さな違和感や気持ちのすれ違いがあつたとしても、あと少しの命なのだから、と思いかえしました。

せめて子供を遺して欲しい、と願いましたが、夫は頑なに言い張つたのです。「俺が死んだら早く忘れて欲しい。身一つで再婚するほうが、条件も良いだろう」

夫には、こういうふうな私のことを、肝心なところで冷静に突き放すところがありました。この世に執着や未練を残すまい、と心に固く決めていたのかもしれない。「私が再婚なんて、する筈ないじゃないの」と、怒りを込めて言いました。

夫は朝の寝起きが悪く、やっと起き上がった会社に出かけても、午前中からすでに疲れていました。顔色はどす黒く、夜の睡眠も浅く、小さな物音でも目を覚まして

ます。考えてみませんか。ドナーのことも含めて、今すぐに返事はしないで、ご家族でよく話し合つて、考えてみて下さい」

夫のなかで一気に噴き上がったのは、生きる欲求と喜びでした。それは真つ当な厳しさで、私を巻き込んでいきました。移植の段取りに関して、矢継ぎ早に質問を重ねている夫の姿には、鬼気迫るものがありました。

夫の机の周りを掃除していたとき、積み重ねられた本の下に隠すように退職届が置かれているのを見つけました。夫はまだ「いよいよ駄目か」とは思いたくなくて、会社に出さないまま、こんなところにつっこんでいたのです。「退職願」とあまり上手ではない字で書かれた表書きをみているうちに涙があふれ、「夫を生かさなくてはならない」という思いが突き上げてきました。

熱っぽい躁状態に巻き込まれた夫の母親と二十歳になる妹は、初めのうちは、「ぜひ自分の肝臓を」と口々に言つたのでした。血液型は、夫の父親以外の三人が、ドナーに適合していました。医者から、詳しく移植手術の説明を受けました。合併症の可能性などの、リスクが分かつて行くにつれて、五十八歳の母親と二十歳の未婚の妹のテンションが、お互いをかばう言葉になつて下がり

はじめ、やがて沈黙のうちに皆の視線が、私に向けられるのを感じました。

「移植手術の経費は保険を使って三百万円から六百万円の幅だが、対処的治療でいろいろ上乗せになれば一千万円を超える場合もある」という説明をうけて、貯金が五百万円くらいしかない私たちは顔を見合わせましたが、資産の豊かな夫の父親が、「いくらかかってもいい。まると援助するから」と力強く言ってくれました。「だから、あなた」と夫の母親が私を見つめて、釘を打ちこむように言いました。「だんなさんの健康は奥さんの幸せでもあるんだし、夫婦は一心同体なんだから」

「奥さん」と私に向かって言ったのは、家族の話し合いを黙って聞いていた医者でした。

「言っておきたいんですが、ドナーを引き受けることに、絶対に無理はしないでくださいよ」

「無理も何も、誰かが引き受けなかつたら夫は死ぬじやありませんか」そのときの私は、ゆっくり思いを巡らす余裕もなく、切羽詰まった気持ちのまま答えました。

ひとりの帰り道は月夜になりました。高い空をうす紫色のちぎれ雲が流れておりました。月は、薄い透けた雲を纏ってもすぐに雲から抜け出して耿々と輝きます。病院下の土手道を歩くと、低い池が、黒い水面に細紐のよ

うな月の光を並べて、岸に向かって音もなく、のしのに揺れ動いておりました。池からは眼を背けました。

ドナーになる決心を告げると、夫の両親は私の肩にとりすがって涙を流しました。夫は急に我に返った表情になり「いいのか？ おまえ、本当にいいのか？」と、くどいほど繰り返して、私は「いいに決まってるじゃない。もう言わないでよ」と、夫の言葉を遮りました。

気力に満ちた、誇らしい気持ちでした。最愛の夫のために肝臓を分け与える人間が、この自分である幸せ。視界が明るく甘く広がり、胸がときめきました。本当にいいの？ と自分に問う声がありました。邪魔をするものは押し潰しました。

夫は東京の病院に転院しました。私も、追いかけるように検査のために入院しました。福岡から一緒に来た夫の両親はホテルに泊まっていました。私にも病院の個室を頼んでくれて珍しい果物などを差し入れてくれ、入院に付きものの身のまわりの物も、細かく気を遣って整えてくれました。夫は自分で選曲して編集したCDを、差し入れてくれます。手取り足取りのお世話に、お姫様みたいな気分でした。

手術の二日前に、夫が私の病室にきました。何となく

しょうか。期待のなかで不安を引きずったまま、いよいよ手術を明日に控える日が来ました。夫の病室に行くと、「今日は夜遅くから雨なんだってね」などと話していましたが、とうとう訊ねました。「ねえ、どうしてドナーが私なの？ あなたの血を分けた人のほうが自然だと思って思っただけ。なぜお父さんやお母さん、妹さんじゃなくて、もとは他人の私なの？」

「いまさら、そんなこと言っくなよ」夫はあからさまに嫌な声を出しました。「お袋は血圧が高いし、親父は血液型が合わなかったじやないか。結婚前の妹の腹に大きな傷跡をつけるのは可哀想だろう。おまえらしくもないことを言う」それじゃ消去法じゃないの、と私はがっかりしました。いちばん欲しかった言葉は、聞かせませんでした。夕方、剃毛後に入院病棟の風呂に入りました。

他に誰の姿もありませんでした。更衣室の鏡の前に立ち、腹部に目を凝らしました。ウエストがきゅっと締まって、縦長のお臍のあたりがややふっくらとした、シミひとつない色白の肌です。明日にはこの腹に、「J」の字形にメスが入れるということを、知らされています。狙いは、肋骨の右の下辺りにある肝臓です。医者が惚れ

夫の大きな手が温く乾いて私を包み込みましたが、私は素直に返事が出来ませんでした。夫が言うのは、移植そのものの成功例であって、ドナーの方の成功例ではないのでは……。ドナーの合併症は数に入っているの

「……ねえ、手術だけど、無事に成功するかな……」夫は、「大丈夫」と、強く私の手を握り締めて言いました。「ふたりに頑張ろう。あの先生は今まで失敗例はないらしいよ」

夫の大きな手が温く乾いて私を包み込みましたが、私は素直に返事が出来ませんでした。夫が言うのは、移植そのものの成功例であって、ドナーの方の成功例ではないのでは……。ドナーの合併症は数に入っているの

惚れした口調で言うところの「あなたの非の打ち所のない美しい肝臓」です。

翌日の手術のことを考えはじめると、せつば詰まった気持ちになり恐怖が喉を締め付けてきます。

細かい震えが足下から上がってきました。血にまみれ脂肪の層を見せて、ぱつぱつと切り開かれた自分の腹が目に見えかたのです。頭に浮かんだのは前にテレビで見たことのあるガン患者の手術の映像でした。患者は、顔をモザイクで隠されていました。体の他の部分もほとんど緑色の覆いで隠されています。切開された部分だけが真っ赤な踏みつぶされた花のようでした。血の匂いがむつと立ちのぼる光景です。医師たちと看護師たちが、チューブが数本挿入されている穴に頭を寄せて、おのおのの役目に合わせて真剣に手を動かしています。あのと、慌ててチャンネルを変えたのですが間に合わず、今もまだ目の底に濡れた鮮やかな血の色がこびりついたので、雨の音が聞こえ始め、夜が更けていくにつれ、鳥肌がひとつひとつ立つような恐怖を、どのようにしても振り払いようがなくなりました。身を縮めて耐えていましたが、見回りの看護師が部屋に入ってきたときに「怖いんです。手術、やめたい」とあえぐように告げました。「大丈夫、大丈夫。たいてい、ドナーの方は土壇場で怖

から」と見舞いすらくわってしまいました。母はあまり丈夫でもなく、小心者で取り越し苦労ばかりするので煩わしかったからです。私の病室を訪れるのは夫の両親と妹だけでした。三人とも気持ちは、やはり激痛に苦しむ夫の方に向いていて、私の病室に来てはすぐにそわそわと帰って行くのです。手術は非常にうまくいき、夫の予後は拒絶反応も起こらず、私の肝臓はびつたりでした。私は、という、順調ではありませんでした。手術後肝臓切除断端部膿瘍ができました。感染を起こして高熱に浮かされました。それでなくても、激痛でのたうち回り、吐き気とひどいだるさのなかに泥のように眠り、また激痛で目覚める、というくり返しでした。

すべてがぐにやりと曲がった色鮮やかな風景のなかで、うめきながら揺れていました。夫の両親も妹も、ねじ曲がっていました。私たちは両親と妹に別れを告げて、目眩のなかを、幅の広いオレンジ色の木の階段を上がりました。階段の上は私たちの家でした。私と夫は、階段の上のスカイプールの観音開きの鉄門扉をあけて、家に入ろうとしました。でも門扉は夫だけを呑み込んで、私をぺつと吐き出しました。私は、歪んで波打つ階段を駆け落ち、点滴スタンドもひっぱられて転げ落ち、チューブにつながれた平べったいビニール袋が、中に溜まった生

くなられるんですよ。でも、安心していいんですよ」土壇場……。土壇場とは、江戸時代の斬首の場のことを指しているのではないのでしょうか。朝まで一睡も出来ず、このまま逃げようか、と何度も思いました。

十時間かけて、私の肝臓は三分の二が切り取られ、切り取られた分量の隙間が出来て閉じられました。私の一部が、夫の腹の中に埋め込まれたのです。真っ白だった麻酔から徐々に醒めていきました。看護師が点滴の袋をセットしている音が聞こえました。意識を必死に集中させ、「主人は？」と看護師に訊ねたのです。「あ、大成功」と、看護師が笑顔を見せて言いました。差し出された看護師の手を握りしめました。

麻酔が覚めると、七転八倒の激痛が始まったのです。大丈夫、と医者も看護師も言いました。何が大丈夫だったのでしょうか。術後、集中治療室の夫には医師たちや看護師たちの厳しい見守りがあったようでしたが、傷口がふさがるのを待つだけの私のところには、あまり注意が向けられていない感じがしました。

私には身内は母しかいないのですが、「鹿児島から出てくることはないよ、大丈夫なんだから。こういうときそばでおるおるされるとかえって気を遣って私も疲れる

ぬるい体液を揺らしてどぶどぶと跳ねました。斜めに見あげた空が黄色い雲形定規の形をしていました。

ひどく気持が悪くなって吐きました。吐くたびに傷口が、開いたのではないかと思うほど激しく痛みました。夫はなぜ、門の中からすぐに出てきて、私を助けてくれないのだろう、と幻覚のなかで夫を恨んでいました。

幻覚は三日ほど消えましたが、吐き気と発熱とたるさと激痛だけは残りました。何よりも辛いのは痛みです。傷口の縫い目が痛いのかと思っただけですが、体の奥の切断された血管や肝臓のあたりから響いてくる痛みのような気もするのです。どこが痛いのか分からないけれどもただただ鈍く重く激しく痛いのです。切り取られた肝臓の部分のすぐには体が認知せずに、肝臓の失った部分の神経が痛がっているのかもしれない。レシピエントよりもドナーの方が、健康だった分、敏感に強く痛みを感じるのだ、とも聞きました。

夫の両親は「嫁の苦しむ姿を見るのは身にこたえる」と言って姿を見せる回数が減っていききました。会社勤めの義妹も、「これで安心」と言って、帰って行きました。私以外の誰も、体も心も傷つかなかったのだ、とあらためて思いました。

夫は、少し長く歩けるようになると、大きなマスクを付けて、点滴台を引きずり、身をかがめながら見舞いに来てくれました。夫の顔からは、あのだす黒さが薄れていました。

夫はにやりと笑って寝間着をめくり、自分の傷を私に見せました。私のJの字型の傷口とは違って、逆丁の字型の傷が赤く盛り上がっており、いくつものシリコンチューブが腹から生えていました。傷口は私と同じようにホチキスの針のようなもので止めてあります。一つ一つのチューブの先には、それぞれ四角のビニール袋が下がっています。私も寝間着をめくって、自分の腹から出ている二本のチューブと、かぎ裂き型の傷を、夫に見せました。「お互い冗談抜きで痛いよなあ」と夫が顔をしかめます。私は子供が駄々をこねるように言いました。「こんなに痛いと分かっていたら、ドナーになんかならなかつた」笑ってくれるかと思つた夫が、急に暗い顔をしたので、あわてて、「嘘よ、嘘。あなたが元気になって嬉しい」ととりつくりました。

けれども、またすぐに、痛みとだるさを訴えて、「あんなに健康だった私があなたよりも予後に苦しむなんて理不尽だと思う」と言うのでした。

何を言っても夫は受け止めてくれる筈だ、と信じてい

たのです。自分のほうが弱っている今、今度は夫から保護されるべきだと。

夫が死から逃れられたことは、私だって本当に嬉しいのです。でも、その一方で、どこから湧いてくるか分からない得体の知れない怒りや空虚感、意外なことに夫に對しての説明の付かない敵意のようなものまで感じていたのです。肝臓だけでなく、他の大事な何かを切り取られて、失ってしまったような気がしていました。それが何なのかは、分かりませんが。

まるで私の傷口が怒っているようだった、というのが最も近いでしょう。一種のショック状態に陥っていたのかも知れません。

この訳の分からない混乱を、肝臓を共有し傷の痛みを共感して「分身」に近くなつた夫こそ、うまく説明してくれるに違いない、と私には思えました。痛い、辛い、苦しい、だるい、この大きな醜い傷跡は一生消えないのかしら。私は我が儘な幼女のように夫の顔を見ればぐずぐずと甘えて訴えました。

聞いている夫の顔が少しずつ硬くなり、歪んでいくのが分かりましたが、私の愚痴は止まりませんでした。

長いあいだ、言いたいことをすべて呑み込んできた私だったのに。死を免れた夫に安堵したら、あとは崩れる

ばかりでした。

ドナーの入院は十日から十四日と説明を受けていたのですが、合併症の回復があまり順調ではなく原因の分からない高熱を出したり、腎不全の症状が出たりした私の入院は、三カ月近くにわたりました。順調に回復した夫は二カ月で退院し、両親と共に福岡に帰っていきま

退院前に私のところに挨拶に来た夫に、「私を置いて帰ってしまふの？ そうか、もう私はご用済みだものね」と嫌みを言いました。寂しかったからです。さすがに夫は顔色を蒼くしました。でも本当にその時の私は、自分が捨てられた抜け殻のように思え、夫が日々回復するのに比べて相変わらず体調が良くないことに、焦りや怒りを感じていました。なによりも、夫に私の思いが素直に伝わっていかないことに苛立っておりま

夫は「おまえ変わったな」とぼつりと言いました。「なんだか手術を境にして、お互い気持ちバラバラになつてしまつた気がするよ」

「違うよ、近くなつたのよ」と、本気で言いました。だって、夫の体の中の肝臓は全部私の肝臓なのですから。夫は黙って私の髪を撫で、片手をあげると、振り返らずに病室を出て行きました。

福岡に帰つた夫とは何度も電話で会話をしました。そのたびに、夫の反応にいらだちました。夫が、母親に甘える子供のように、薬の副作用の話や自分の回復状況ばかりを報告するからです。それは手術を受ける前の私たちにとつては、ごく自然な姿でした。「夫は近いうちに死ぬだろう」という前提があつたから。

今はその前提も覚悟も消え、それどころか私の方がダウンしています。私も負けずに言いつのりま

つらい鬱症状や痛みやだるさやむなしさを、夫の言葉にかぶせるようにぶつけ、「私はあんなに健康だったのに」と必ず付け加えました。携帯メールを打つては送りました。夫が返事をくれな

いと、直接電話を掛けて夫を責めました。気まずいやりとりが重なつたあげく、夫は「こういうときに人間って本性が出るんだな。おまえはあまりにも自分のことしか考えていない。俺も毒のこもつた肝臓を買つたもんだ」と言い、かつとなつた私がい返し、あとは、切り口上なメールのやり取りになりました。夫は仕事への復帰に焦っており、足を引つ張る妻への怒りを溜めて余裕のないどす黒い声を出すようになってい

雲の厚い夕暮れ、トイレから戻ってくると窓辺の枕頭台に、封書が一通、置かれていました。差出人は夫でした。手紙など滅多に書く夫ではないので、怪訝な気がしました。

手紙は、手術の前夜のことから書き出してありました。あの夜の私は、夫の病室を訪れて、夫が「いよいよ明日だねえ」とベッドに起き上がった私に笑顔を向けたとき、たとえようもない違和感を感じたのです。私は緊張しきっており、周りのすべてが自分に馴染まず、それはひやりと鳥肌が立つような苛立ちでした。隠しきれずに一気に本音が出てしまったのでした。「怖いよ、すごい不安な気分。私、こんなに健康なのに、明日はお腹を切り開かれてしまうのよ。合併症が出たらどうしよう。ねえ、なぜこの私なの？ あなたの血の繋がった人たちがはなくて？」

私は、夫が、消去法ではなく、「俺は、おまえの肝臓じゃないと嫌なんだ」とさえ言ってくれたらどんなにこの恐怖がなだめられるかと思つて、繰り返したのです。夫の手紙はそのときのことと触れ、「おまえのくどくど繰り返す言葉を聴きながら、俺はショックを受けていた。俺にとっては母親のような強く頼もしい存在だったおまえが、急に遠く他人に思え、裏切られた気がした」と書

かれていました。そこまで読んで私は、「ものすごく擦れ違つてる……全然分かつてない」と呟きました。

「手術後、合併症が出るとおまえの怒りは増して、お互いの気持ちがお互いに悪化していきはかりだった。ドナーであることを盾に、俺の心まで支配し束縛しようとするおまえには、つくづく疲れ果てた。このさき一生、おまえに縛られるのかと思うと、芯からぞつとする。俺たちは本当の意味で夫婦だったのだろうか。おまえにとつての俺は、いったい、どんな存在だったのだろうか。」

考えに、考え抜いた。そして結果を出した。おまえには深い恩義を感じている、だからこそ、これ以上、憎み合うことだけは避けたいと思い、この決心をした。

読みながら何度も、なに、これ、と地団駄を踏みたくなりました。でも、決心つて、何のこと？

封筒のなかを見ると、四つ折りの薄っぺらな用紙が貼りついていました。出して開いてみると、離婚届でした。血の気が引ききました。続きを読みました。

「先生方は、二十時間もの長時間の手術のあいだ細心の注意と使命感で身を削つて、あの難しい仕事をやりとげて下さった。まるで夢のようで、深い感謝を感じている。大事な肝臓をたくさん分けてくれたおまえにも、とても口には言えないほど感謝している。」

手紙をもついちど読みかえしたあと、息が詰まりそうになつて、震える手で窓をあけました。

窓の外には、いつのまにか雪が降っていました。夕暮れの薄暗い空から、沈むように落ちてくる蒼白い泡雪です。忘れ雪のほどけた雪片は、病室の窓の外を過ぎ、病棟の間の暗い通路にすばまって吸い込まれていきます。

見上げるうち、体のなかまで降り込んでくる気持ちがあるほど、雪は濃く密になつていきました。落ちてくる雪片を片手のひらに受けて、握りしめますが、薄く頼りない冷たさしかなく、手を開くと、わずかな水の滲みがあるだけでした。

ようやく退院の日が決まりました。このまま鹿児島の実家に帰るしかないのか、とまだ迷っていました。

そして、売店にティッシュを買に行こうとして、路にも迷いました。

古い病院は何力所もの増築で巨大な迷路になつており、エレベーターも何基もあって、降りる階数を間違えた私は、自分がどこにいるのか分からなくなつたのです。まだ歩くのにも慣れておらず空を踏むような足で、広い病院を上がつたり下りたりまっすぐ行つてみたり戻つたり曲がつたりしながら売店を探し回りました、行き会う

白衣の人たちに訊ねるのが三回目になつたときには、泣きそうになつていました。売店はみつからず、疲れ果てて、何とかようやく自分の部屋に戻ることが出来ました。窓辺の後ろ姿は夫でした。

見たとたんに膝がぐくりと折れました。前屈みに這うようにベッドにたどりついて座り込みました。肩で息をして目を閉じていました。枕頭台の奥につつこんだままの離婚届のことで頭がいっぱいでした。あれを何とか撤回して貰わなくては。

夫は私の様子を見て「大丈夫か」と訊ねました。

うつむいたまま頷きました。夫を盗み見ると、顔が真ん丸になつていのに気づきました。これはあらかじめ聞かされていたことで、強い免疫抑制剤の副作用で、半年くらいは仕方がないのだということでした。手足の痺れや血圧上昇や頭痛、血糖値の上昇という副作用を抱えて夫はここへやってきたのです。生真面目な夫は、会社でも仕事に復帰するために、かなり無理をしながら働いているのではないのでしょうか。

夫はしばらく無言でしたが、やがて鞆をあげ、「とりあえずの慰謝料だ」と言つて「三百万円」と表に書かれた茶封筒をベッドの上に置きました。「退院のあと何やかやと費用がいるだろう。」

夫の両親が用意したに違いありません。夫のムーンプ
エイヌに気を取られていた私は、封筒を見たときに頭
に血が上りました。

「何もかもお金を出せばいいと思ってるの？」
話し合う余地はもう無いのでしょうか。もどかしくパ
ジャマの前を開いて傷跡をさらしました。

「私にとって、この傷は何だったの？」

夫は、身構える表情になって言いました。

「どうしてすぐに、そんなふうな言い方をするのかなあ。
おまえは俺が死なないと分かったら、態度が変わってし
まった。そうやって一生、恩義で縛るつもりなのか」

「そうではなくて」と私はいらだちました。

夫は前へ進む体力や気力を得たとたんに、どんどん行
ってしまつて、弱り切っている私を忘れて置き去りにし
た、夫こそ、変質したのだ、と言いたかつたのですが、
すでに聴く耳を持たない顔になつた夫に何を言つても、
虚しく無駄なことでした。

「どんなに理不尽だと思つても、口に出してしまつたら
おしまいだという言葉が、人と人との間にはあるんだよ。
おまえには、その限度も他人と自分との区別もない。お
まえと話すと、ひどく消耗する。へとへとに疲れ切つて
しまつた。もう、耐えられないんだよ」

くらいが相場のはずですから。家財や持ち物は私の退院
よりも早く鹿児島の実家に送り届けられていました。

鹿児島に帰つても、腹部の膨満感や傷の引き摺れが残
り、肩や背中が痛んで疲れやすく、日常生活もおぼつか
なく、しばらく母の世話になるしかありませんでした。
ずいぶん面倒をかけてしまいました。時には鬱に沈み、
時には攻撃的になり、時には自分がとても無価値な廢物
になつてしまつたように思い、母に苛立ちをぶつけてし
まう日々でした。

なぜ、手術の前に、医者や夫と、もつと深く話し合わ
なかつたのだろうか、なぜ、芯からの納得も覚悟もない
まま、あわただしく手術に踏み切つてしまつたのだらう
か、と何度も思いました。三年間「やがて来る夫の死」
を覚悟して暮らしたのですが、私は決して強い人間では
なかつたのです。人並み以上の、感情の強さ激しさはあ
つても、決して理性の強さではなかつた……。あのころ、
私自身も夫も、それに気づかなかつたのです。

離婚届を受け取つた翌日、「私のことを、もつと分か
つてよ。手術で、私がどんなにショックを受けたか、理
解して」と、電話に出た夫に必死に訴えたのです。

あのとき夫が、黙つて携帯を切り一日中電源まで切つ

夫はそう言つて黙り込んだあと、軽く咳払いをして改
まつた声で言いました。

「手紙に書いた気持ちには本当だ。大きな犠牲を払つてく
れたおまえには感謝しているよ。だから、しばらく生活
に支障が出ないように考えてる。俺は親の家に帰るから
家を処分するよ。今なら四千万くらいで、不動産屋が買
うそうだ。おまえの家具や荷物は鹿児島に送るから」

夫はこの世に未練や執着が育つことを怖れていたころ
と本質的に変わつてはおらず、移植によつて人間関係が
深くなることを嫌悪する酷薄さまでが加わつたようです。
それが夫の本来の性格だとは、思いたくありません。

「夫婦つて、そんなに簡単に崩れるもの？ そうじゃな
いでしょ！」いらだつて夫の腕を叩き、声をあげて泣き
ました。心を絞り出すほど泣いたのですが、夫は「お前
といると消耗する」と、無表情に繰り返すばかりです。

帰り際に、ドアを開けようとして振り返つて、心配そ
うに「金、いるだろう？ これからの生活、どうするん
だ」と念を押した夫に、無言で背中を向けました。

あとの夫の対応は早かつたようです。

私が鹿児島の実家に戻るか戻らないうちに、預金通帳
にきつちり四千万円が振り込まれました。たぶん、夫の
両親も手伝つたのでしよう。あの家はせいぜい三千万円

てしまつようなことをせず、耳を傾けてくれて優しい言
葉で答えてくれていたらなあ、と何度も思うのです。

ときどき、自分の過去から厳しく拒絶されるように感
じ、傷口が引き摺るたびに「何なのよ、これは」と泣き
叫んで荒れてしまふ。泣き叫ぶことで、投げ捨ててしま
えるか、と思つても、何ひとつ捨てられず、逆に重くな
つていくばかり。母はそんな私から目を背け、黙つてこ
らえているようでした。

中秋の月が空に掛かるころになつて、私の気持ちもや
や落ち着いてきました。母が「あなたの世話も身にこた
える年齢になつたねえ」と冗談のようにぼろりとこぼし
たので、考え込み、「もう大丈夫だから、帰るよ」と告
げました。「帰る？ どこに帰るのよ」と母はひどく驚
きました。私の帰るところはやはり福岡市しかないの
です。「福岡に帰つたら気持ちも落ち着くかもしれない
仕事もみつけて頑張るから」と説得しました。

母は、痛ましそうな悲しそうな顔をしました。最後
はもう何も言いませんでした。

夜中も眠らない街に住めば寂しくないだろう、と思い、
福岡市の中心地天神エリアを探し、警固公園の裏にある、
横長に巨大な十五階建てマンションの、ワンルームを買

うことにしました。夫が最後にくれた金の半分が消えました。家財道具もろくにない部屋での独り暮らしが始まったのです。仕事を探す気持ちは、まだ起こりませんでした。

やがて、八階の部屋から、警固公園に飾られた青く冷たく煌めくクリスマスイルミネーションが見える季節になりました。夜になって外に出ると、歩道に並ぶ屋台から流れ出すラーメンやおでんの匂いが漂い、人恋しさを誘います。

天神のビルの中の細い路地が特に好きです。灯火が仄かに洩れて出る通りには、人の脂がしみこんだようなアスファルトが横たわり、歩くうちに自分もぬたぬたになっていくようです。若者向きの古着屋や、手作りのアクセサリー店、中古CDの店、こじんまりとしたコーヒーの店や、居酒屋、何となく薄汚れた感じがするけれども居心地が良く、何が出てくるか分からない路地には、ニンニクを炒める匂いがたちこめています。

若者たちで混雑する天神西通りに出ると、人の息づかいを感じ、かさばる服と触れ合い、すれ違いざまに一瞬近くなる会話を聴きます。石ころのような意識だけを残して溶けて行きます。

一番大きな通りに抜けます。舗道に満ちるさまざまな

いく地下街が思い浮かびます。地下街から上のビルにも華やかな売り場があり、頭の中で、幾重にも重なった絵地図になるのです。

エネルギーのざわめき巡る通りから熱気が立ち上ってきて、首を伸ばしてあたりを眺めている私の顔を撫でます。そろそろ、仕事を探さなければなりません……。

夫の腹のなかで、私の肝臓は完全に満ち、すっかり馴染んだことでしょう。

夜中に傷口が引き攣って目が覚めるとき、子を孕んだ女のように腹を撫でながら、夫のことを懐かしく愛しく思い出します。傷口の違和感や背中痛みも、夫と繋がっているしだと思えます。夫の傷も時々痛んで、そのたびに私のことを思い出しているだろうかと思いません。けれども、経緯を思い出すと、裏返すように混乱してしまいます。じわりと怒りが広がっていき、夫の後ろ姿に「肝臓泥棒」と叫んでいる夢を見るのです。同時に、去っていく夫の服の裾を掴むように泣き叫んだ自分の姿も思い出されます。溜息を漏らして寝返りをうちます。

レバー

天神という街は福岡中の人々を引き寄せます。割合に狭い地域ですから、よく知人にも出会うのです。

足音。ビルの出入り口から吐き出される温い空気。頭上から降ってくるいくつもの大型テレビ画面の音声。クラクション。車の走行する音。交差点の信号を知らせる柔らかな単調なアナウンス。ビルの角に吹くうすら寒い風。誰のものでもない自由な街の、私の姿もまた、それらの影のひとつです。

大牟田線に沿った天神地下街に降りて、明るくきらびやかな店を両側に眺めて歩きます。地下街は、三越や大丸や岩田屋などのデパートや、いくつもの商業ビルに繋がっています。新しくできた南の地下鉄に通じる側の地下街は、目をみはるほどすすべに光ってお洒落で垢抜けています。

最近、「ロンドンの雑誌に『世界で最もショッピングに適した都市はフクオカ』という調査結果が載っている」と、銀行の備え付けの雑誌で読みました。ですが、今の私には流行のレースやフリルの多い服も、飾りの多いバッグも似合いません。欲しい物が、何もないのです。賑わいのなかを、目的もなく透明人間のように歩き回って時間を潰すだけです。

地下街から上がって、すぐ隣にも感じる距離のマンションに戻ります。窓をあけて見下ろしていると、蟻の巣のようにあちこちのビルの地下に根をのばして広がって

福岡に戻ってきて五カ月ほど経ったとき、福ビル前のスクランブル交差点で、夫に、ばったりと出会いました。夫の勤める会社も天神にあるので、予想も期待もしていたのですが、やはり動揺しました。

喰い入るように夫を見つめました。二年ぶりに見る夫の顔からはあのだす黒さは消えて、引き締まった肌にも生色があり、肝臓が良好に働いていることを示していました。背広もワイシャツもびしょと整っており、落ち着いた中年男の雰囲気になっていました。

「鹿児島に帰られたんじゃないですか」夫の口から出た敬語に驚いて、すぐに答えが声になりませんでした。ようやく、「いまも、実家に？」とせいじつばい何気なさそうに訊ねました。夫もさりと答えました。「春日原駅の西に楓ヶ丘っていうところがあるんですが、そこに家を買いました。去年の暮れに再婚したんで」

笑顔で頷きましたが、息を吸い込むばかりで呼吸が出来なくなつて、ろくに夫の顔も見ずに「じゃ……お元気で……」と言って歩き出しました。どこをどう歩いてマンションに戻ったか覚えていません。

夫に出会って以来、日が経つにつれて、私の中で生まれて育つていく思いがありました。

夫は今、どういふ暮らしをしているのだろうか……。

夫の住む春日原に行き、夫の生活を見てみたい。

思いは深く、強烈になっていきました。もはや仕事を探す気持ちなど消え失せていました。

福岡駅から西鉄大牟田線に乗りました。おすおすと春日原駅に降り立ったとたんに、私の思いは「だつて、そうでしょう？」と無言の叫びとともに一気に目覚めたのです。わずかに保たれていた理性は総崩れになり、楓ヶ丘はどこ？ と半ば躍るように思いました。

駅のホームから、あたりを見渡しても、どこにもそれらしい丘は見えませんでした。

教えてくれたのは、駅前のよく繁盛しているクリーニング店の店主でした。駅から西に行ったところのガソリンスタンドのある四つ角を右に曲がり、少し行くと、緩やかな坂道沿いに洒落た新興住宅が建ち並んでおり、メーブルが各戸の前に植えられているので、楓ヶ丘と呼ばれている、と店主は説明しました。

宝探しをする女の子のような気持ちで、夫の家をみつけに行きました。

楓ヶ丘の住宅は、門も表札もない家が多く、どの家の前にも郵便受けに銀色のプレートが下がっていて、家のナンバーが示してありました。その日は、どこが夫の家

か、分かりませんでした。

くり返し見知らぬ土地をうろろする理由がなく、人目が気になりました。駅前のあのクリーニング店にプラウスなどを出してみる、という用事を作りました。

一カ月が過ぎた頃だつたでしょうか。

クリーニング屋に立ち寄ったとき、初めて「妻」に出会つたのでした。

「あとでまとめて主人が受取りに来ますから」と、楓ヶ丘の住所と家のナンバーと夫の姓を告げる、背が高い若い女がいたのです。

預かり証を貰う女を、まじまじと見つめました。「お先に」と笑顔で会釈して出ていくのは、夫の「妻」に間違いないですね。タンポポのような明るい素朴な笑顔でした。

「妻」の後をつけました。

「妻」は私の顔を知らないでしょう。夫は再婚するときには、当然、元の妻との写真をすべて捨てたはずですから、皆さんの結婚式のスナップ写真も、アルバムに二冊もあつた新婚時代の旅行の写真も、ゴミとして処分して、無かつたことのように忘れることにしたはずですよ。

でも、何をいくら捨てても、夫自身の腹の逆丁の字の

傷跡までは消せません。「妻」はその傷跡をどんな思いで眺めているのでしょうか。

ようやく分かつた夫の家の近辺を、人目を避け、動悸を抑えて、ただうろつくと歩き回るばかりの私でした。気づかれないように夫を見るチャンスは、ありそうではありませんでした。

最終電車の窓から、遠ざかる夫の町を振り返るたびに、虚しく座席に沈み込みます。けれどもすぐに訳の分からない焦燥感に追い立てられ、翌日になるとまた春日原に向かうのでした。そうやって、夫の住む町を歩き回る日々が繰り返されました。

気がつくとき春日原に行くことが、生活の何よりも大事な部分になっていたので。夫の住む町の空気に触れたい。見たい。そう思うともう矢も盾もなく無性に行きたくてたまらなくなるのです。理由？ 体の真正面にこんなに大きなJの字型の刻印が刻まれていれば、夫を忘れることなどできはしないではありませんか。

レバー

私の住処であるマンションのエレベーターを八階でおりると、目の前にうねうねと細い廊下が延びていきます。廊下は、至るところで二股三股に分かれています。廊下の左右には、ワンルームのドアがずらりと並んでいます。

同じ形と色のドアのなかから、自分の部屋のドアを見つけて出すためには、ドアに刻まれた銀色の部屋番号を追っていくしかありません。考え事などして歩いていって、自分の部屋のドアの前を通り過ぎてしまします。

ビルの耐震偽造問題がにわかに取りざたされるようになり、このビルも慌てて修復に取りかかつたようです。廊下の壁に細かいひび割れがはいつているのは、私が鹿兒島にいた一年ほど前に起きた地震の傷跡です。白い壁のひび割れすべてに、灰色のコンクリートが埋められているので、それが廊下いっぱい広がっている蜘蛛の巣に見えます。堅牢に見えた建物ですが、修理に入った段階で、こんなに多くのひび割れがあつたかと気づきました。けれども住人たちは、誰も声を上げることもなく、ひび割れの壁の中の、自分たちの部屋に影のように吸い込まれていきます。

「妻」が外出する姿が見えました。私は、あわてて斜め前の家の郵便受けの影に隠れました。

「妻」は、骨の多い大きな傘を広げながら、門から三段ほどある石段を下りてきます。薄いピンクの傘の色が「妻」の顔を明るく浮かび上がらせています。雨は急に激しい吹き降りになり、みるみるうちに「妻」の着慣

れた感じの薄いコート裾が濡れて染みになっていきます。素足に履いた洗いざらしのスニーカーも濡れるまま、ゆるい坂を大腿に下りていきます。

私のへなちょこの折りたたみ傘は風にあおられて、右に左にと、体ごと振り回され、もはや自分まで雨風に紛れて見分けもつかなくなってしまうた気分、隠れるどころではなく「妻」の後を追いました。「妻」は、片手の大きなビニールのバッグを何度も抱えなおして歩いていき、駅前前のクリーニング屋のガラス戸を開けてはいっていききました。

たつぷりと濡れた傘が、店の外に立てかけてありました。「妻」の笑い声がなから聞こえました。店主の冗談に、ほがらかに笑っているのです。

この店には、いま、私も冬のコートを一枚出しています。最初のきっかけは、この辺りを徘徊する理由づけだったので、あながい良い仕事をするので、大事なよそ行き服も出すようになりました。店主に私の携帯電話の番号を教え、住所は、この町には、妹が嫁いでいるもので、と言って、あいまいな番地を言ったのを「ああ、それは仲の良いご姉妹で」と疑いもしないようでした。「妻」は、店の軒先に立っているが濡れの私と擦れ違つときに、「どうもお待たせしました」と微笑んで頭を下

それなのに私は、日々、喰いちぎられる肝臓を持っていく気がしてなりません。プロメテウスのように……。

この世の果ての、荒れた岩山に鎖で縛りつけられて、毎日、酷薄な光を眼に宿したハゲタカに腹を裂かれて、肝臓をついばまれ続けるあの神話の男。

プロメテウスの喰い裂かれた腹が、一夜のうちに閉じて肝臓が再生すると、また頭上から焦げ臭いハゲタカの大きな影と羽音がおそってくるのです。日々再生する肝臓を、日々喰いちぎられる、永遠にも思えるくりかえし。ヘラクレスに救われるまでの、長い渇きと苦しみ。

私のヘラクレスは、どこにいますのでしょうか。夫の体のなかに、今も私がいるのだ、と素直に思えるときには、目のなかから光があふれるような、高揚感があります。けれども、私の体のなかには、夫はひとかけらもないのだと思いがたり、すべてが私を指さして、愚かな女、と嘲笑しているように思えるときは、目のなから暗い水が流れ落ちる気がします。

深夜、春日原から戻り、ゆっくりと上がっていく薄暗いエレベーターの壁に、靴ずれの踵の痛みと、鉤裂きの裂け目のかたちをした傷跡と、徒労感を抱いて、目を閉じて寄りかかっているときなどに。

げました。落ち着いたふんわりとした声でした。声を掛けられてうるたえた私は、不器用に頭を下げただけでした。「妻」は、往來に出ると、やはり傘を風に煽られてよろよろとしましたが、すぐにしっかりと立て直して、坂をあがって帰っていききました。

「リンゴ」の店主とも顔なじみになり、黙っていても濃く香りの良いコーヒーを出してくれるようになりました。暇なとき、店主はたいてい、短いあご髭を引っ張りながら雑誌を読みふけています。客はあまり多くなく、たいてい無口な年配の男です。目をつぶって歌を聴いているように見えて、居眠りをしているらしい老人もいます。店主のお気に入りの、ニーナ・シモンのピアノの弾き語り、一日中流れている変わった店です。粘りのある強く太い歌声に聴き慣れると、彼女の母性的な許容、生々しい手心のある土臭い現実感に、いつときだけでも抱き寄せられて、癒され、安堵する気持ちになります。けれども歌声が消えると、やはり、確かなものの何もない現実ばかりが戻ってくるのです。

電車の窓から見える月は、夜な夜な、膨らんでいきます。小さく削がれた私の肝臓が、再生していったように。

「妻」の丹精したアマリリスを、盗みました。

白地に赤の線が入ったアマリリスです。

夫がいちばん好んだ花。一本の茎の先に四方に向かってきつぱりと頭を上げて咲く、生命力に溢れた花。私と夫の庭にもたくさん咲いていました。このアマリリスはきつとあの庭から移されたものに違いありません。あれは、夫と私だけの花。夫は、私の分身のようなものから「妻」と私も、陰で重なっているに違いありません。雨の薄暗い夕方に私は前庭に忍び込み、アマリリスを一本折り取り、黒いレインコートの下に隠しました。私のワンルームマンションに、夫と私のアマリリスを飾りたかつたのです。アマリリスはあのあてもない寂しい私の部屋で、輝くように凛々と咲くことでしよう。

けれど、気づかないうちに強く握りしめてしまったらしく、春日原の駅のトイレに入ってレインコートの下から出してみたら、アマリリスは体温に温もってしおれ、そのうえ、花びらが折れてちぎれかけていました。

ぶらさがった白い花びらは、真ん中に毛細血管に似たよじれた筋が暗赤色に滲み、蛍光灯の薄暗さをじつりと吸い込んで、今にも血がしたたり落ちるのではないかと思わせました。見知らぬ植物のようでした。慌ててゴミ箱に押し込みました。

顔をあげて、鏡に写った自分の姿にぶつかって、はつとあとずさりしました。雨の夜に溶け込むために着込んだ真つ黒な長いレインコートや、髪を濡らさないようにかぶったスケート選手のような黒い帽子には、細かい雨粒がびつしりとついで、光る筋になって流れ落ちていました。猫背の顔色は蒼く、頬はこけ、血走った目の下に黒い隈が浮かんでいて、この異様な女もまた、見知らぬ者のようでした。

鏡から顔を背けたとたんに、目眩がしました。最近、体調が優れず、ときどき立ちくらみや目眩が起こります。

翌々日には雨が上がり、アスファルトはどこどころに湿り気を残しながらおおかた乾き始めていました。シヤワーを浴びて、さっぱりと白いレースの縁取りの木綿のワンピースに着替えて、春日原に向かいました。

そして、夕暮れに、駅構内の人の群れのなかに、夫をみつけたのです……。

柱の陰から、五メートルほど先を歩いていく夫に、熱い視線をあてました。

すつきりと整えられた襟足の、やや俯いて歩く癖のある横顔も、鞆を持つ手の、関節は大きいけれど先の細い神経質な長い指も、あの頃とすこしも変わっていません。

愚かな行動だと思いがちでも、春日原に行かずにはいられません。この不思議な充実感、快感、多幸感はどこから湧いてくるのでしょうか。深いところから真つ直ぐ出てくる喜びではなく、雑草の草むらが右に左に幻のように、波のように揺れる、そんな喜びなのですが。

地下街から駅のホームまで上がると、駅舎の外れから電車が姿を現すのが見えました。

滑り込んできた電車は、強い雨の匂いを放っています。マンションを出るときには、薄日が射していたのに、震える水滴をまとった車両は鳴動してゆっくりと停車し、息を吐き出して静かになりました。濡れて走ってきた電車は、生き物のように新鮮でした。終点の客を降ろし、始発が変わった雨の電車に乗り込むのも新鮮でした。夫には、出会えませんでした。

「リング」で「妻」と遭遇しました。

「妻」は友人らしい若い女性とコーヒーを前に話し込んでいました。ドアに取り付けられたベルが揺れて鳴る音に、「妻」が顔を上げてこちらを見ました。私は、反射的に目顔で挨拶をしてしまいました。一瞬、胸が冷たくなりしました。「妻」は、驚いた顔で軽く頭を下げました。「なにもの？」と、彼女の連れが小声で訊ねる声が聞こ

以前に比べると、腰の座った安定が感じられます。そのことを喜びながら、ふっと寂しくも思います。

喰いいるように見つめていると、まぶしくて、瞼も息も震えます。言いたいことは山のようにあるのですが、いえ、大事なことはひとつしかないのですが、近づく勇氣はありません。こんなところをうろついている私を見られたら、二度とこの町へは来られなくなるでしょう。

夫の姿をゆっくりと見られただけで満足でした。駅のトイレで手を洗い鏡に向かって濡れた指で髪をかき上げる私の目は生き返ったようでした。

満足して早めに戻ってきた福岡駅は、賑やかで明るく昼間のようでした。下りのエスカレータを、塾帰りらしい女子高生二人が、飛び跳ねて逆にながらつてくるのに出会いました。エスカレータを降りる途中で忘れ物に気づいたらしいのです。大きな声で笑い叫びながら、エスカレーターが下るスピードを強く力強さで、駆け上がってきます。女子高生の髪が揺れ、ミニの襷スカートが波打ち、太ももがむき出しになった足がどすとどと音を立て、腰のあたりでバッグが跳ねて、元気のエネルギーが風のように私の服をかすめて擦れ違っていました。

「おお、若いーって素晴らしい」私の後ろで、中年男が小声で歌う声が聞こえました。

ええました。「妻」は「ん？」と首をかしたただけでした。妻に背中を向けて、座りました。ニーナ・シモンが「Don't Let Me Be Misunderstood」と、野太い声を引きずって、哀願するように歌っていました。

この巨大なマンションは、夜に帰ってくる人や、逆に昼に眠って夜の仕事に出る人が多いようで、昼間は声も足音もほとんど聞こえません。子供の声は皆無です。ときどき無人島に住んでいるような気がするほど静かです。静かなマンションで静かに薬缶を沸騰させるのは、電磁調理器です。炎はありません。岩山に鎖で縛られ、肝臓をハゲタカに喰われ続けたプロメテウスの罪は、下界の人間に火を与えたからというものでした。電磁調理器の見えない火には生の手応えがなく、熱と炎は違うのだ、いつも思います。

天に逆らって人間に燃え上がる火を贈ったプロメテウスを、へそ曲がりな男だと思いがちでも、その力強さ、野放図さにとても惹かれます。愚かで弱い人間を体を張って愛したこのギリシャの神に、あこがれと親しみを感じます。

そして私ときたら、自分の熾火のような妄執を、我欲だと分かりながらどうしようもなく、風を入れてかき混

せて燃え上がらせるしか、心を鎮める方法がないのです。

夕方に窓を少し開けたまま春日原に行き、夜半に戻ってくる。コウモリが、カーテンの裏にうずくまっています。手を差し出すと、毛のない裸の翼を広げ、赤い口の中の小さな牙をむき出して、金属が軋るような声を上げて激しく威嚇してくるのです。翼を広げても掌より小さな灰色のコウモリです。何らかのアクシデントで、方向を見誤ったのでしょうか。狂ったような目つきをしています。この「不法侵入者」の気の猛りが怖くて怯え、あわてて大きく窓を開けて追いつき出そうとしました。繁華街の空は一晚中、薄紫色に明るいです。コウモリは、翼を斜めにつっぱったまま、私を睨んで身動きをしませんでした。

翌朝、コウモリの姿は消えていました。

目眩と立ちくらみが治まらないので、定期検診を怠っていた病院に久しぶりに行きました。

なんでこないの、とやんわりと叱られ、血液検査をされ、貧血があるねえ、と言われました。

「移植の後遺症ですか？」

「いや、関係ないと思いますよ。貧血によいのは、レバ

ーなんだけど。あなた、食べられるかな？ 食生活で体の基本を作らないと。薬にはかり頼ってちゃ駄目だし、仕方ないよねえ」

ドナーの経過が記された書類を見ながら医者は、子供に言い聞かせるような優しい口調で言います。たしかに最近、食事のことなど、忘れていたことがありました。

スーパーで、豚のレバーが塊で入っているパックを手にとつてじつと見つめていると、男の店員が近寄ってきて「それ、とても新鮮ですよ。綺麗な良いレバーですけどねえ」と、溜息をつくように言い、横からトレーをのぞき込むのです。

「あなたの非の打ち所のない美しい肝臓」と、うっとりと言った移植手術直前の医者声を、つい思い出してしまいました。

店員の震えるような息が頬にかけ、あわててレバーをスーパーのカゴにいれました。

病院行きですっかり疲れて、春日原には行きませんでした。スーパーの袋をさげた帰り道、マンションの周りの日暮れの空に、小さな黒い影が無数に飛び交っているのを見ました。コウモリです。あの方向感覚を見失ったコウモリは、ちゃんと混ざっているかしら、と立ち止まって見上げました。

その夜、半分だけレバーを薄切りにして煮ました。

なめらかな赤黒い肝臓の薄切りは、白っぽく固く反り返りました。

ひとくち食べて、肝臓には持ち主の記憶が残っているのだろうか、と思つたとたん、吐きました。食卓に戻つてまた食べます。この肝臓を持っていた豚のことを考えてしまいます。食用にされてしまった一頭の豚の、生きていたとき見ていた柵の上の明るい青空とか、母豚に甘えたり走ったり転がったりした子豚時代のこととかを……。吐き気をこらえて食べ続けます。肝臓の五階建てビルほどの素晴らしい機能が、粉っぽく口の中で溶けていきます。

「リンゴ」でまた「妻」と遭遇しました。

「妻」はひとり、サンダル足を組んで雑誌を見ていました。ドアのベルの音に顔をあげ、すぐにまた雑誌に目を落としました。この店特有のどろりと濃いコーヒーには口を付けられた様子がありません。

めくりもしない雑誌をぼんやりと眺めている「妻」は、友達と待ち合わせをしている風でもないようです。夕食の支度には掛からなければならぬ時間に、こんなところまで、ぼつと座り込んでいますでしょうか。

心を決めると、「こんにちは」と声を掛けました。

「妻」は顔を上げて、うつすらと微笑みを浮かべました。「ときどきお会いしてますね」

思わずたじろぎ、窺うように「妻」の顔を見てしまいました。が、ええ、と頷きました。

「この町に住んでおられるのですか？」と訊ねてきたのは「妻」のほうでした。

動悸を抑えながら笑顔で答えました。

「いえ、天神に住んでいるんですけど、仲の良いすぐ下の妹がこの町の住人で、よく遊びに来るんですよ」

明るく言ってしまうと、何だか、本当に親しく行き来しているすぐ下の妹がいて、この春日原に住んでいるような気がしました。

「妻」は、あっさり「そうなんですか」と頷きました。それなのに、私を見つめたまま視線を外さないのです。私も、眼の縁が薄く赤らんだ「妻」の顔を黙って見ていました。「妻」は「ああ、すみません、いえ、もう別になにも……」と、ぼんやりとした声で言いました。

私は、「妻」の甲高の豊かな色白の素足に、吸い込まれるように見入っていました。踵や足指が、うつすらと桃色に染まって、柔らかなそで、触りたくなるほどです。

深夜になって、冷蔵庫に入れたままだった残りのレバーを思い出ししました。流し台の小さな蛍光灯の下で、手のひらにのせて見つめました。

生のレバーは、電灯の光を白く載せて光っていました。暗赤色をした、なめらかで美しい完璧な肝臓。肌理の細かな粒子の集まり。血管の穴があいています。

あれから「妻」の薄桃色の優しい足指が、私の眼に焼きついたまま離れません。

自分の心の内に爪を立てるように、レバーに爪を立てて、ゆっくりと握りつぶしました。指の間からつぶれた粘膜がぬるぬるとはみ出して、ステンレスの流し台に落ちました。

重く吸いつく音でした。

ひと月ほど経って、夕方近くに春日原の駅で電車を降りた時に、ホームで「妻」を見かけました。

電車が行ってしまうと、波が引くようにホームに人影はなくなりましたが、ベンチに座り込んだ「妻」は、背中を丸めて、小さくたたんだ赤いハンカチで口を押さえ、動く様子がありません。

「どうかしましたか？」と声をかけました。

「妻」は、ハンカチを口から離して、少し驚いた眼で私

を見上げました。

「あの……、お加減、悪いんですか？」と、ハンカチを指しました。

眼の縁と鼻の頭を赤くした「妻」は首を振って、ハンカチをバッグにしまい、笑顔を浮かべると、かすれた声で言いました。

「あ、いいんです。これ、つわりなんです。もう六カ月になるというのに、なぜだか、ときどき吐き気がわつとこみ上げてくるんですよ。吐きはじめると、とまらなくなつて、最後は喉が荒れ果てて、それでも吐いて、便器が血で真っ赤になつてしまうくらい。さっき、また吐いてしまつて、喉がいたくて」

「妻」は、どこか浮かんだように言い、私は「ああ、それは……」と、なかば裏返つた声で呟きました。

「妻」の着ているお洒落な白い半袖ワンピースが、ウエストのふわりとした服であることに、ようやく気づきました。晴れやかな妊婦服のせいで「妻」がますます大柄にゆたかに見えることにも。

「妻」は、かすれる声がかしいように、ときどき咳払いをしながら、話を続けました。

「主人は、おまえがトイレで吐いている気配を感じるのがすごく嫌だ、と言つんですよ。何とかしろ、って責め

られているようで、いたたまれない気持ちになるんだ、つて言います。ちょっと考えすぎだと思いませんか？」

「妻」は、うつむいて、自分の腹に両手をゆっくりあてました。すべての指が、柔らかく広げられて丸く腹を包み込むのを、私はぼんやりと見下ろしていました。

「妻」は手を腹にあてたまま私を見上げ、微笑をうかべて、なおも言つのです。

「主人は、このお腹の中に別の人間がいるということをはじめて興味悪く思つてみたいなんです。こないだ、赤ちゃんがはじめてお腹の中で動いたんですよ。嬉しくて、主人に『触ってみて』と言つたんです。すると主人つたら、顔いろを変えて『気持ち悪い』と後ずさりをするんですよ。信じられない。どうお考えになられますか？」

私は、のろのろと首を横に振りました。考えたくはありません。捨てた妻のその肝臓が、自分の腹の中に植えつけられている事実、夫がどう折り合いをつけたのか、なんて。

不意に、私はうろたえて、両手で腹を押さえました。傷口から、何かがこぼれだして、逃げていくような感じがしたので。

何も見えないけれども、押さえた手指の隙間からも、しずかにこぼれていくものがあるのです。

耳の後ろで、ドクン、ドクンと、血の奔る音が聞こえました。

ようやく「赤ちゃんは、パパによく似てるかも……」と、押し出すように声が出ました。

「妻」は、大きく息を吸い込んで、背中を伸ばすと、かすれた喉を何度も咳払いして整える様子でした。

そして、丁寧な、冷静な声で言つたのです。

「よかつたら、生まれたら、抱いてやって下さいね」

……視線を、先に逸らしたのは私でした。

どのようにして「妻」と別れて改札を抜けたのか覚えていません。

春日原の駅前の風の吹く道に、行き先を見失つて、ただ立ちつくすばかりです。

手の下で、長い長い縫い糸を引き抜くように、傷跡が引き攀れて震えました。